

黒姫山（くろひめやま） 2,053m

黒姫山は斑尾山、妙高山、戸隠山、飯縄山とともに北信五岳のひとつに数えられている。北信五岳を東方から望めばその中央の山。新潟県境のすぐ近く、上水内郡信濃町の西北部に位置する。また北から妙高山－黒姫山－飯縄山と連なる火山列の山でもあり、妙高火山群に属する複式火山である。地元では信濃富士とも呼ばれている。

黒姫山西麓の氷沢川は北流して関川に合流し、関川は黒姫山の北のすそ野を東に流れている。この氷沢川－関川の流路が長野、新潟両県の県境である。つまり、黒姫山は山のすぐ西側と北側を県境とする長野県北端の山である。

戸隠連峰の東に位置し、関川を挟んで頸城山塊の妙高山の南に対峙する独立峰である。東山麓にある野尻湖を挟んで斑尾山が対峙している。3.5 km 西隣には、佐渡山（標高 1,827.6 m）がある。1956 年（昭和 31 年）7 月 10 日に山域は妙高戸隠連山国立公園の特別地域内に指定され、外輪山周辺の内側の区域はその特別保護地区に指定された。西山腹には大ダルミ湿原がある。

山名はこの山にまつわる黒姫伝説によるといわれるが、全山樹林に覆われ黒々とした姿を見れば、お姫様のような愛らしさを含んだ黒い山からその名が付いたかとも思われる。

東山麓の信濃町柏原地区、もっと詳しくいえば仁之倉部落が俳人小林一茶の誕生の地である。かつての北国街道、今の国道 18 号が突っ切る柏原の町の中に、一茶の旧宅や墓が保存されている。また、柏原の町並みのすぐ北東には別名芙蓉湖と呼ばれる美しい野尻湖があり、吸い込まれるような青い水面に黒姫山の倒影を映している。

黒姫山の三角点（2,053m）は、実は外輪山の最高点であり、それよりわずか低い御巢鷹山（小黑姫山）といわれる中央火口丘（2,046m）が真の頂上といってよい。昔ここで鷹狩りをしたので、その名がついたという。

さて、それにしても黒姫伝説を紹介しておかなければ、訪れる火口原の静寂な雰囲気味わってはもらえない。

昔、この山の東方中野市の城主高梨摂津守政頼に、黒姫という美しい一人娘がいた。ふと娘を見染めたのは志賀高原の大池にすむ大蛇で、若侍に姿を変え、城主政頼に姫を嫁にと懇請したが、小体を知られ断られてしまった。怒った大蛇は大池の水で城下を押し流そうとしたが、やさしい姫は洪水を避けるため自ら進んで大蛇の化身に嫁ぐことにした。しかし蛇身と結ばれる苦悩は何としても消し難い。姫が苦衷を訴えると、さすがの若侍も同情し、二人は黒姫山に登って相果てた。

二人の束の間の桃源郷になった火口原の七ツ池は、溶岩や周りの樹木と調和して、未完成ながらも見事な日本庭園のようである。池塘の間には高さ 10 cm ほどの小ザサが敷き

つめられている。二人が手に手をとった遠い昔の幻想をよぶ所である。

黒姫山はこんな悲しくも美しい伝説を秘める北信濃の名山であり、1度は登ってみたい山である。樹林に覆われた山といったが、それだけに新緑と紅葉の季節はとくに美しい。

黒姫山は成層火山であり、構成岩石は主として複輝石安山岩である。最新の活動である4万年前ごろに現在の中央火口丘である御巢鷹山（小黒姫山）（標高 2,046 m）を形成した。最高点（標高点 2,053 m）は、中央火口丘の東南東 1.0 km の外輪山にある。この山は森林が非常によく発達しており、下部は広葉樹林に覆われ、約 1,100m以上ではオオシラビソ、コメツガ、などの針葉樹林帯となる。なお東麓から南麓にかけてはカラマツ、ヒノキ、スギなどの見事な植林地が多い。

山頂をとりまく外輪山にはオオシラビソ、モミ、コメツガなどが疎生し、ハイマツもある。標高的には森林限界に達していないが土壌の栄養成分が乏しく、カルデラ内壁には高山性植物群落が成立している。火口壁から火口原にかけてはキバナシャクナゲ、チングルマなどの高山植物が見られるが、中でもオサバグサの群落が注目される。この種は北信五岳ではこの山にだけ見られるものである。外輪山と中央火口丘の間には火口原が広がり、「黒姫山湖沼・湿原群」として日本の重要湿地 500 のひとつに選定されている七ツ池と峰ノ大池などの池塘がある。また七ツ池にはクロサンショウウオも生息している。その他注目したいものとしてヒカリゴケ、ミヤマツチトリモチ、テングノムギメシ（微生物の働きによりできた寒天状の細粒）などがある。周辺の山域に分布するチシマザサは江戸時代からざるなどの竹細工の材料として麓で利用されていた。

参考文献

信州山岳百科Ⅲ 信濃毎日新聞社